



50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	番号 ばんごう	上の句 かみく	下の句 しもく	作者 さくしや							
君がため惜しからざりしいのちさきへ きみがためおしからざりしいのちさきへ	御垣守衛士の焚く火の夜は燃え みかきもりえじのたくひのよるはもえ	風をいたみ岩うつ波のおのれのみ かぜをいたみいわうつなみのおのれのみ	八重葎しげれる宿のさびしきに やえむぐらしげれるやどのさびしきに	由良の門を渡る舟人かぢを絶え ゆらのとをわたるふなびとかぢをたえ	あはれともいふべき人は思ほえで あわれともいふべきひとはおもおえで	逢ふことの絶えてしなくはなかなか あうことのたえてしなくはなかなか	逢ひ見ての後の心にくらぶれば あいみてののちのこころにくらぶれば	契りきなかたみに袖をしぼりつつ ちぎりきなかたみにそでをしぼりつつ	恋すてふわが名はまだき立ちにけり こいすちようわがなはまだきたちにけり	番	上の句	下の句	作者							
長くもがなと思ひけるかな ながくもがなとおもいけるかな	昼は消えつつ物をこそ思へ ひるはきえつつものをこそおもえ	砕けて物を思ふころかな くだけてものをおもうころかな	人こそ見えね秋は来にけり ひとこそみえねあきはきにけり	ゆくへも知らぬ恋の道かな ゆくえもしらぬこいのみちかな	身のいたづらになりぬべきかな みのいたづらになりぬべきかな	人をも身をも恨みざらまし ひとをもみをもうらみざらまし	昔は物を思はざりけり むかしはものをおもわざりけり	末の松山波越さじとは すえのまつやまなみこさじとは	人知れずこそ思ひそめしか ひとしれずこそおもいそめしか	みぶのただみ	壬生忠見	清原元輔	中納言敦忠	中納言朝忠	謙徳公	曾禰好忠	恵慶法師	源重之	大中臣能宣朝臣	藤原義孝